



誦誦

故人五百題
上



誹諧

部類

故人五百題

悉皆



叙



官浦子珠を得るは文諸載のまうひの心あるに
 物あつて用ゆる時を珠と好くし磨きたる時を
 為名にひびきしり珠を得人と思ふも
 此官浦子の地理を志するに記を官一導守人を
 於て後其所に至る夜子我々多岐多し唯
 を風俗子遊む志も然るに師の教を傳
 説言微中而塵実自在の思世に於てをさすこと

師爲後を慕はば一者則て平飲ひたり如き
時あかき其孫にありて以て其の現名をたらし
岐也の字新子は其時より初より其孫の二字を
取ひても今も能くや人あり其孫て今の
師ふ其の端を字して誘換の中あり如きなり
然るも又年あり一日曠地居りて其書中
より二少冊を取りて与ふ其をたるん其孫
元録の世に十哲を抄めり一門徒之子の

説くは其の事大徳孫守其家固り其書を四序の
歌を又百に忍びて其神心を其家傳りて其孫
其の之孫子なり其孫子入りの爲に其孫孫孫の
孫も傳つて其詞家なり其孫子たるを先
懐きとありて其友にらん其家傳りて其孫子
とありて其孫子なり其孫子なるは其孫孫孫の
孫子頻りに推轂をむるを其孫子孫孫孫の
孫子孫孫孫の孫子孫孫孫の孫子孫孫孫の

菅原一すくさ後江都へ文をよびて其書
と乞に雙歌志の條へ字を添へて
彫工と書残るるに爲しぬ是の類
なるを和式隨儀の條の條に
書る歌の集とあるの條に
抄に記するを
抄に記するを

南總守田山暎地守



凡例

○古人の書其書名の類縁より
拙字の類縁なるものハ不
定に於て其種別の書名を
かゝるを其書名を其書の
傍に記するを其書名を其
諸條の書名の子に記する
の類下にあるを其書名を
○其書名を其書名の子に記する

あゝ野宮の古御子あゝて其妻との御子也

○はるかに遊む古人あゝていふもえ縁幸平のいふ

たのて妻をす其代をも跡をいふやあゝて以縁

測海のたのて思ひ減へはもさく船々の縁あす

乃て又大槻とも案す

○甚し御子古人也といふもたさく縁をいふ事也

幸頼と園其いふく連綿といふ事周らむいふ事

鬼つゝ事あゝて母といふ事いふ事あゝ

○初宮の事いふ事も時代を替へかゝると縁をいふ

もあゝ其縁を白濁水

○妻林使たりと事黒髪美柳吉く縁我と園京保の

流の船より船前日縁の妙子をまてを白濁水

○幸頼十たの御の縁をいふ事縁合をいふ事曲りも

又原人政味といふ事古人の方言をいふ事又原の二御子

○縁をいふ事あゝて御子の事え縁をいふ事縁合をいふ事

あゝて弟心く案に多くいふ事縁合をいふ事

○歌子重てを縁をいふ事縁合をいふ事縁合をいふ事

縁合をいふ事縁合をいふ事縁合をいふ事縁合をいふ事

又あゝて縁をいふ事縁合をいふ事縁合をいふ事

縁合をいふ事縁合をいふ事縁合をいふ事縁合をいふ事

○まして圖書の類子能承とつる部も不分級の書も前代
 のつるものさゝも難かにさすまぬ
 ○ま子のめくろく人の國所得あるまゝかゝる東語集載せる
 よる傳へるものさすもその意あるて所子用はれぬ
 各字を難きまの坤と志人とせし徳筆法撰ねし一
 字中其意不明とあるもの難てさす人の意あるの類も
 あるは註集もそのいふ所はまはるしむるは補ひぬ
 ○の語し事申すは其まはるしむるはあつるはれぬ
 書のことしあつるしむるは事あるまはるしむるは
 あつるしむるの例あつるしむる

○其まもく書源のまの道子のまのしむるはれぬし
 るは八の形り毫釐のまの意を承るはさすらるる
 にもさすまの意も馬馬のまのいふはれぬしむるは
 にも若きまの意も難しき難しきあつるはれぬし
 ○の所あるは申莫逆のなはるまのまのいふはれぬし
 向かひもさすまの意もあつるはれぬしむるはれぬし
 ○まのまの意もあつるはれぬしむるはれぬし
 にもさすまの意もあつるはれぬしむるはれぬし
 にもさすまの意もあつるはれぬしむるはれぬし
 にもさすまの意もあつるはれぬしむるはれぬし
 の書源の流るるとすまの今冊のちかゝるも難しき

探歌の帯出函の意歌工出案の一冊とす

○五多歌と云ふは、母と子に和して六の余歌

ありて月録子丁付あるを其歌を写す志あり

五多歌の下を欠合して何丁目と引合ふ處

松崎若菜夫人

丁未歳
癸卯



古人五十四歌 春之部月録



山菜	初丁	櫻	二	糸山	三	紗櫻	四
元日	四	神宮	五	まつり	九	紗籠	五
神うすこ	五	まつり鳥	五	紗籠	五	紗一層	五
まつり夢	六	春堂	六	今細の表	六	花のほろ	六
江戸の表	七	福寿軒	七	川松	七	大みく	七
はなみ	七	居居	七	籠表	七	たは	八
喰つ	八	蓬菜	八	忌懸	八	書紗	八

年玉	八	葉山草	八	葉羽子	九	久光	九
美玉	九	植物之部					
子の丸	九	小和川	九	七種	九	蘇	十
美葉	十	芥	十一	梅	十一	柳	十一
美葉	十一	下菴	十二	美玉	十二	澤大玉	十四
美葉	十四	才の葉	十四	葉の葉	十五	久光	十五
美葉	十五	五加木	十五	すまじ	十五	柳葉	十六
美葉	十六	安き玉	十六	木瓜	十六	美玉	十六
接木	十六	くさ	十七	葉つ	十七	葉の葉	十七
種おろし	十七	梅	十八	海棠	十八	連翹	十八
利木の葉	十八	李子	十九	辛夷	十九	木蓮花	十九

山	十九	苗代	十九	五歌	二十	柳葱	二十
山	二十	山吹	二十	花	二十		
生類之部							
葉	二十一	猫の葉	二十一	白急	二十一	葉の葉	二十三
葉	二十二	春鷹	二十三	雛子	二十四	雲雀	二十四
葉	二十五	乙子	二十五	駒子	二十六	魚子	二十六
葉	二十六	蝶	二十六	虫	二十七	虫	二十七
葉	二十七	蛙	二十七	田螺	二十八	蟹	二十八
葉	二十八	うめ	二十八	角	二十八		
時後之部							
葉	二十九	葉	二十九	葉	二十九	葉	二十九
葉	三十	網川	三十	葉	三十	葉	三十

風中	三十一	入	三十一	入	三十一
あつら	三十一	焼	三十一	雪	三十一
東風	三十二	春風	三十二	雪解	三十二
春の雪	三十三	春の夜	三十四	春の夜	三十四
春の夜	三十四	春の夜	三十四	春の夜	三十四
春の夜	三十五	春の夜	三十五	春の夜	三十五
陽春	三十六	春の夜	三十六	春の夜	三十六
春の夜	三十七	春の夜	三十七	春の夜	三十七
春の夜	三十八	春の夜	三十八	春の夜	三十八
春の夜	三十九	春の夜	三十九	春の夜	三十九
春の夜	四十	春の夜	四十	春の夜	四十

都而百五十二額

十人五百歌 夏之部目錄

生るいり部

あつら	三十一	入	三十一	入	三十一
あつら	三十二	焼	三十二	雪	三十二
あつら	三十三	春風	三十三	雪解	三十三
あつら	三十四	春の夜	三十四	春の夜	三十四
あつら	三十五	春の夜	三十五	春の夜	三十五
あつら	三十六	春の夜	三十六	春の夜	三十六
あつら	三十七	春の夜	三十七	春の夜	三十七
あつら	三十八	春の夜	三十八	春の夜	三十八
あつら	三十九	春の夜	三十九	春の夜	三十九
あつら	四十	春の夜	四十	春の夜	四十

時作之部

東衣	九	衿	九	喜の原	九	葵系	十
巾	十	御母	十	早舟	十	多可舟	十
夏衣	十一	夏斗衣	十一	薩餅	十一	白古堂	十一
新衣	十二	月燈	十二	みし衣	十二	喜鉢	十二
夏衣	十三	松急	十三	鉢	十三	彌	十三
乃	十四	ちまひ	十四	内湯	十四	巾地	十四
乃	十五	舟破	十五	舟	十五	乃	十五
乃	十六	舟	十六	夏の日	十六	夏の日	十六
乃	十七	舟	十七	史半	十七	急薬	十七
乃	十八	舟	十八	早苗	十八	喜田	十八
乃	十九	舟	十九	心扇	十九	陣作	十九

極之部の部

唯子	十一	襦袢	十一	沙室	十一	雲の心	十一
唯子	十二	夕立	十二	土	十二	雲	十二
唯子	十三	夕立	十三	葛	十三	林婦人	十三
唯子	十四	津水	十四	川	十四	心	十四
唯子	十五	夏	十五	秋	十五	秋	十五
唯子	十六	夏	十六	夏	十六	夏	十六
唯子	十七	夏	十七	夏	十七	夏	十七
唯子	十八	夏	十八	夏	十八	夏	十八
唯子	十九	夏	十九	夏	十九	夏	十九

祢のふた	廿九	山七	廿九	志のふた	廿九	柿のふた	二十
ふたふた	三十	花子ふた	三十	牡丹	三十	芍薬	三十一
おほふ	三十一	苔のふた	三十一	けい	三十一	薊	三十一
竹の子	三十二	菘	三十二	茄子	三十二	おろ	三十二
おのふた	三十二	多葉菜	三十二	櫛子	三十二	石合	三十三
まふた	三十三	豆ふた	三十三	早のふた	三十四	横斜	三十四
夕ふた	三十四	紫ふた	三十五	あや	三十五	厚のふた	三十五
ふたふた	三十五	河	三十六	草菜	三十六	蓮	三十六
ふたふた	三十六	抄のふた	三十七	か	三十七	石	三十七
ふたふた	三十七	復録	三十八				
ふたふた	三十八	都					

古人の題のふた

春の部

南總 穂巻 足 授合

花咲て七日の影ふたの影
 志のふたのふたの影
 一僕とわくしありく
 花のふたの影
 花のふたの影
 花のふたの影
 花のふたの影
 花のふたの影
 花のふたの影
 花のふたの影
 花のふたの影

花



春初の猿まきついでに
羽をたはす地をぬれつ
岸の雪すこしをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす

許六
心香
雪香
去来
智存
木香
明坡
史部
杉風
松野
治化
卯七

春初
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす
花の香もかきつをたもたす

翠
翠
友五
元北
仙化
冰花
杉候
梅墩
丘北
尚白
執人
西里

宿入るを物引きやとてたのを
酔ふるをて下鳴くうたの山
隠家子細知る言やと母事
まてあまうたの多歌和位と戸

野明
た明
野明

櫻

木のをまをけも輪も櫻う那
唯中和まから定めぬ山かつら
名のつらぬ取うら白くやばり櫻
ま先まかん一技ありむちも櫻
まから唯和都子牛の白くは

其角
酒堂
其角
酒堂

ひき折て人守らんまむ山さから
又て之れをまてしはまの山はく
昔はまてす子細き山をうり山櫻
まらぬれまてまらぬ一ままから外
山まから細きまてまて板もあ
片櫻を細地ののちも櫻
あまをてし破のまめまてまから
朝まらら麻登まかま白ひひ
山櫻母を母まてまて板もあ
まらぬ船上登の櫻まら
山まらら朝つくまのむを
まらぬの及上の輪家うま

一秩
米山
公事
唯山
當丘
末因
自櫻
山櫻
精輪
杉風
後記
似記

急様

山さくらさくら川のさくら車
是くさくら命押られ様
か入る人のさくらしおさくら
さくらさくらさくら山様
さくらさくらさくら山様
さくらさくらさくら山様
さくらさくらさくら山様
さくらさくらさくら山様

智多
希固
森文
宇王
柳若
石川
乙所
豊波
吉文
尺州

初様

さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様
さくらさくら様の中さくらさくら様

乙所
千那
和及
一笑
鬼費
利雪

遅様

さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様
さくらさくらさくらさくら様

其角
涼菘
史邦

おろしをいへてはつては
遠きもの中にいへる
疎居をいへてはつては

五院
山川
紫雲

元川

元川子田毎の日に
元川子田毎十乃
元川子田毎の日に
元川子田毎の日に
元川子田毎の日に
元川子田毎の日に
元川子田毎の日に
元川子田毎の日に

其角
岩香
吉来
守武
忠知
青山
白川

元堂

元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に
元堂子田毎の日に

岩香
友部
多輝

元日

元日子田毎の日に
元日子田毎の日に
元日子田毎の日に
元日子田毎の日に
元日子田毎の日に
元日子田毎の日に
元日子田毎の日に
元日子田毎の日に

任口
交考
乙由
利牛

元新

元新子田毎の日に
元新子田毎の日に
元新子田毎の日に
元新子田毎の日に
元新子田毎の日に
元新子田毎の日に
元新子田毎の日に
元新子田毎の日に

景輔
可風

初春

我意の初はもさそ初春
枇杷の葉の初はもさそ初春
芝浦や東のくす初春

西野
鉢嶺
初波

春鳥

布りしと為ぬらあわ世の春
まのすそと為ぬらあわ世の春

豊城
三味

初春風

初春風や四海波あそ初春
そよ風や東林波も世の春

宗飛
冬嶺

初曆

一年もあそはあそ初春
昭鏡よそ初はもさそ初春

宗飛
乙虫

初夢

まの夢や初はもさそ初春
初夢のあそはあそ初春
まの夢や初はもさそ初春

春吟
今徳
安室

春立

春よらや齒菜にそ初春
はる春の初はもさそ初春

許山
豊城

春鳥

春鳥の初はもさそ初春
刀さそ初はもさそ初春
竹葉の初はもさそ初春
たの初はもさそ初春

春鳥
豊城
豊城
豊城

草も木もめでたきしり花もま
ゆりの人もめでたしきさる春
西遊にこそあれうそは花のけり
甜味もすまねさるけり春

徳
宗因
休甫
石

春
はる

誰人を蒸る者くおよそ花のま
めんじの物をさるくお春のけり
花のけり花のけり花のけり
むの春を遠くかやたさるけり
花のまきけり花のまきけり
投入り下まも花のまきけり

花
嵐雪
文
釣
柳

江戸
り春

江戸の春
海近く朝のまきけり江戸の春

具
作
号

福
春

福春草もめでたきしり花もま
懸のあつたのまきけり福春
みんまきけり福春

春
扇
急士

門
松

はるまきけり門松のまきけり
花のまきけり門松のまきけり
花のまきけり門松のまきけり

徳
其
吉

大船

大船を去る舟のまゝ舟の白ひし
大船くまゝ舟と有る舟遊む舟
舟の舟の舟舟舟舟舟舟舟舟

防川
松尾
尚白

はる

遠国子梅の花か梅にちひし
たうまの枝のたうまのたうま

北枝

展覧

展覧さうて小強中む娘の子
いとをち和展覧船あまう人

五志
奇号

野暮

西の舟もたれ子 船つて野暮の
及旅の野暮更なるり

岩香
車庸

大著

大著の命をうけくちうし
船中舟を以てて道由候う船

安藤
知七

喰

あつて喰つてあつて喰つて
喰つて喰つて喰つて喰つて喰つて

山風堂
竹居

遠来

遠来の舟を舟舟舟の舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

山居
岩香
鬼要

若殿

若殿や略し年の中へは梅より
つらもちりて時定のちるを那うりり

巴都
和え

若神

若神はちて結ばし文字の音も
大津路の字のちる所 御

宗經
孫

若玉

若玉に梅折るふ雪の影の事
まゆやちの取から世のちりり

言え
言ゆ

若葉

若葉やたふまひりてあて松の蔭
つらもちりて時定のちる所 戸
ちん葉やちるまへちりり

去来
折片
思考

若羽子

若羽子やあこちりてあて松の蔭
つらもちりて時定のちる所 戸
ちん羽子やちるまへちりり

若守
利牛
葉子

水祝

水祝はちて結ばし文字の音も
大津路の字のちる所 御

其角
詰圃

若

若はちて結ばし文字の音も
大津路の字のちる所 御

若守
岩守
乙中

若はちて結ばし文字の音も

子の

子の道に都へ行くの春もう歌
ひくく霞もよる夜あけのこ神子の
傘持を大指袖らふ子の白か

藤
去来
紫幸

小

松

五子白を植て後あてめ松川
以形さや山松哉雪の法はささる
君ら川より多子とあきと船おねる

白尼
重校
字存

七種

七種や梅子や馬子の植笑
形も山松明ぬる新年のよるえ
七とくや雪寄ぬるあき川のそ
あめを鳥松の梅あはるの春

桐春
其角
北坡
枕邊

七種その子えとも似ぬ梅子の
ぬりくくぬに七ぬさつらぬり

車庸
乙由

廿

一ツツせらへて度つちるく廿秋う歌
望をさすの歌子白く形もあは
渡極や廿秋あははく土あうら
窮子ひひりりさせらる廿秋の形
笑りたてみうちあすや山の形亦
形と還帰子廿秋のあきたか
如板の廿秋のうに雪もよりな
夕波の船の中あはれつるあは
雪の中あはれ廿秋の中あはし

其角
嵐雪
猿轡
糸道
我岸
林也
孤屋
此行

梅

春十一

梅の香にのつやのあけ山崎の
山崎のあけ山崎の梅の
形ついで文様のはらあけあけ
うめいけん一梅のあけあけ
破さるる香子咲梅の白ひび
一皮中々白梅のあけあけ
横子あけあけあけあけあけ
あけあけあけあけ梅のあけ
梅のあけあけあけ梅のあけ
月ひあけてあけあけ梅のあけ
梅のあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ

其角
去来
凡非
尚自
梳隣
從古
猶雅
架ト
来山

嵐色子那るあけ梅のあけあけ
大庭子すくあけ梅のあけあけ
梅あけてあけあけのあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけ梅のあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ
あけあけてあけあけあけあけ

丹雪
字白
字那
一梅
中田
急の
あけ
乙中
柳花
冬那
さめ
石那

四光

下草

美州

山草の類一々若くは草花
字の類の類は草花の類
たの草の類を人より草花より
草の類を人より草花より
下草の類の類の類の下
下草の類の類の類の下

美草の類の類の類の類
美草の類の類の類の類
美草の類の類の類の類
美草の類の類の類の類
美草の類の類の類の類

其角 蓮谷 時草 草花 山草 風草 草花 柳花 太極

椿

椿の類の類の類の類
椿の類の類の類の類
椿の類の類の類の類
椿の類の類の類の類
椿の類の類の類の類

其角 蓮谷 時草 草花 山草 風草 草花 柳花 太極

紅梅

紅梅や白の心さるる好まきい
かゝる心は眼にやう葉戸が
紅梅の心あれて後のたふさび
かゝる心さるる様さふんうね
お梅や雪のぬくあち那もの
お梅の心もさるめ法あてい

七重車
杉風
吹雪
梅枝
雪梅
白梅

木
の
葉

木んつゝハハハの心さるる木のため
昔は葉のかゝる形も木のため
昔は木を長ちておさす計めり
夏も木を長ちておさす木のため
木への葉も木を長ちておさす
木への葉も木を長ちておさす

赤活
元北
赤活
白
白
白

葉
の
葉

木への心さるる木のため
木への心さるる木のため
木への心さるる木のため
木への心さるる木のため

山香
子祐
丹紫
雪坡

葉
の
葉

木への心さるる木のため
木への心さるる木のため
木への心さるる木のため
木への心さるる木のため

山香
支考
松舟

葉
の
葉

木への心さるる木のため
木への心さるる木のため
木への心さるる木のため
木への心さるる木のため

山香
金下

五加皮

ちりちりく縮法おすふ五加皮
さうさうてこことた子屋の急伝

味有 扇重

す

禮

おのれまこと何ゆら舞しす五加皮
あさくわくのまより強子甚さう船
白鳥群の房に志を舞すまをれ
終子の尻のなまうらうるまをれ
るまをうらうの活き世のまをれ
たまうらうらひなまをれまをれ
傾城の白雲うらうるすまをれ
ぬまをれにまをれまをれまをれ
扱おれまをれまをれまをれ

菊 聖名 固如 秋色 舟矣 弓草 凉葱 之道 石解

鞆

し

まま入あわをまをれまをれ
鞆の早のあまをれまをれ
まをれあまをれまをれまをれ

圃流 気味 扇重

中夜のぬまをれまをれ
ちりちりく縮法おすふ五加皮
り船のまをれまをれまをれ
かまをれまをれまをれ
まをれまをれまをれまをれ

漁舟 筆指 於文 釋書 支考

割

おのれまこと何ゆら舞しす五加皮
あさくわくのまより強子甚さう船
白鳥群の房に志を舞すまをれ
終子の尻のなまうらうるまをれ
るまをうらうの活き世のまをれ
たまうらうらひなまをれまをれ
傾城の白雲うらうるすまをれ
ぬまをれにまをれまをれまをれ
扱おれまをれまをれまをれ

草雀 支考

木瓜

砂川やそとにけり木瓜のそと
木瓜のそとははみ味子ほりり
乃其にまつてく味や深きのは
是の血を木瓜は割るは木瓜

猪籠
田部
梅至
山川

苦角

言酒子共角あつてきう形
川渡り流をまきうき急の角

尚か
猪籠

樓木

人さう物はおもあつて樓木は
はらうとく火のぬきあつて
ちし柳をまきうけらるる
中世はと踏まあつて樓木
樓木は角の角年はんはは

尚か
猪籠
田部
梅至
山川

猫浜

山屋りるまもあつて和作
半つてはあ古きまこの猫浜の
日の影を猫の浜やけり
うまのまをまきうけらるる
まをまきうけらるるま

其角
杉風
一桐
石山
山

桑橋

山屋りるまもあつて和作
半つてはあ古きまこの猫浜の
日の影を猫の浜やけり
うまのまをまきうけらるる
まをまきうけらるるま

出芳
仙化
氷化
重五
急士
尚白

草

草の草の中は草あり部あり
おははあわふ草あり部あり
草の草の中は草あり部あり
草の草の中は草あり部あり
草の草の中は草あり部あり
草の草の中は草あり部あり

其草
史部
草草
草草
草草
草草

種

種あり部あり部あり部あり
種あり部あり部あり部あり
種あり部あり部あり部あり
種あり部あり部あり部あり
種あり部あり部あり部あり
種あり部あり部あり部あり

其草
草草
草草
草草
草草

桃

桃の草の中は草あり部あり
桃の草の中は草あり部あり
桃の草の中は草あり部あり
桃の草の中は草あり部あり
桃の草の中は草あり部あり
桃の草の中は草あり部あり

其草
史部
草草
草草
草草
草草

海棠

海棠花の咲く時
花の色もさきま
かゝる花の思ひ
海棠花の咲く時

重頼
酒巻
てや
春周
尚白

連翹

連翹花の枝子
花の色もさきま

柳春
柳子

梨の花

梨の花の咲く時
花の色もさきま

交考
岩伴
尚白

李子

李子の花の咲く時
花の色もさきま

尚白
蓮香

桑葉

桑葉の花の咲く時
花の色もさきま

尚白
巴久
蓮香

赤蓮

赤蓮の花の咲く時
花の色もさきま

五郎
尚白

芍薬

芍薬の花の咲く時
花の色もさきま

仙代
昔来
春久

苗

代

苗代をアノ所を東のかうしう
那うりちかすれいあひも那う
苗代はあまの塔のあかき
あひくろひのあまのすく
苗代や仁王の御船定の
那うりちかすれいあひも
流るるあまのすく
苗代のあまのすく
那うりちかすれいあひも
苗代はあまの塔のあかき
あひくろひのあまのすく

支考
許
米
支考
子英
而得
史邦
尚
松
多

世

世

世

狗吠のあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく

史邦
尚
松
多

苗代はあまの塔のあかき
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく
あひくろひのあまのすく

史邦
尚
松
多

世島

世島和歌集の巻末に「梅の影
 うらみす和柳のしほの影乃ち之
 世島の影をゆくしほに和歌集の
 うらみすらんあしと世島の朝の影
 世島和歌集の巻末に「梅の影
 うらみす和柳のしほの影乃ち之
 世島の影をゆくしほに和歌集の
 うらみすらんあしと世島の朝の影
 世島和歌集の巻末に「梅の影
 うらみす和柳のしほの影乃ち之
 世島の影をゆくしほに和歌集の
 うらみすらんあしと世島の朝の影

其角
 去来
 史那
 尚角
 函空
 素男
 地枝
 如新
 利平

世島和歌集の巻末に「梅の影
 うらみす和柳のしほの影乃ち之
 世島の影をゆくしほに和歌集の
 うらみすらんあしと世島の朝の影
 世島和歌集の巻末に「梅の影
 うらみす和柳のしほの影乃ち之
 世島の影をゆくしほに和歌集の
 うらみすらんあしと世島の朝の影
 世島和歌集の巻末に「梅の影
 うらみす和柳のしほの影乃ち之
 世島の影をゆくしほに和歌集の
 うらみすらんあしと世島の朝の影

曲聖子
 西夷
 五折
 若え
 凡兆
 乙生
 柳若
 文世
 新方
 若角
 若角
 而明

猫 九 志

猫の母の志は
母の志もす
神志の志は
志の志も
志の志も
志の志も
志の志も
志の志も

志の志も
志の志も
志の志も
志の志も
志の志も
志の志も
志の志も
志の志も

白 志

鳥 九 志

鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も

鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も

鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も

鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も
鳥の志も

春 子 雀

雀のやうな雀もあたらうそこの家の
巣もあつた雀もあつた雀もあつた
すくめあやめ雀もあつた 雀の巣
人の家のあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた

雀
舟竹
櫻市
其角
其角
其角
其角
其角

雀 子

雀のやうな雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた
雀もあつた雀もあつた雀もあつた

雀
舟竹
櫻市
其角
其角
其角
其角
其角

空る

色も傾きおぼしき世に燕
山のほとけとくをうすしの
鎌倉の街を過るのす燕の
はまをくわをももつ所の
あまをさして流る中へ
あふくと埃をく所の
乙子の葉を吹きり燕の
あめの紙帳の中やあつ
そまをや行くもあつと
をまをよとよとてはま
乙子のゆをひけて中へ
世の中は桂枝をよめは

其の
尚か
金に
方磨
想誰
長に
本守
一毫
乙中
柳若

駒を

何事かを續てまはる世に燕
文殿のりりく遠へ乙子
乙子のちをさあも解く
ゆりりあつ燕の
駒をの月のまをさつ
あつ乙子のまをさつ
く地のまをさつ
山の井の駒をさつ
秋のまをさつ
乙子のまをさつ

海老
多
乙子
解く
駒を
す
同
式
子
乙子
乙子

駒を

駒を

蝶

おのよしし春もはせむぬる胡蝶
猶か子のらん人のまらん人胡蝶
蝶のわたりし春もはせむぬる胡蝶
まの柳子もよしし春もはせむぬる胡蝶
西の山もよしし春もはせむぬる胡蝶
余半徒の柳もよしし春もはせむぬる胡蝶
枝もよしし春もはせむぬる胡蝶
ていしし春もはせむぬる胡蝶
悠もよしし春もはせむぬる胡蝶
歩もよしし春もはせむぬる胡蝶
湖もよしし春もはせむぬる胡蝶
野の柳もよしし春もはせむぬる胡蝶

弱
其角
柳
嵐
嵐
嵐
嵐
嵐
嵐
嵐
嵐
嵐

口蛇 蜂 規

口蛇の月の所はせむぬる胡蝶
安ののりまらそよかやあめの足
ひさきまらそよかやあめの足
からよきあやめしきまらそよかやあめの足
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶
後をよしし春もはせむぬる胡蝶

支考
玉芽
改通
改通
改通
改通
改通
改通
改通
改通
改通
改通

蛙

雨の蛙 家なきの形 子もなき形
 高かきと 蛙あし 守のり 守
 雨はらぬ力 こそ 母こゝろ ありあけ
 昔年の死を 身も ちりし 蛙 水
 雨を 春風 吹く 岸 蛙 水
 轆つゝ 雨 中 以 定 ころ ころ 形
 廿連 池子 せ ち 常 の 蛙 ころ 常
 指 乃 人 子 志 ころ ころ ころ 形
 晴 乃 花 の 形 亦 け かり ころ 形
 も ち ころ ころ ころ 流 ころ 蛙 ころ
 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ 形
 ころ ころ 常 常 常 ころ ころ ころ 形

高き角
 其の角
 大科
 本南
 北城
 下州
 言え
 海老
 柳花
 麻又
 多味
 石塚

田

螺

蟹

海 岸 の 子 端 あり け ころ 田 ころ 形
 ち ぬ ころ ころ 田 ころ 田 ころ 形
 ぬ ころ ころ 田 ころ 田 ころ 形
 苔 大 ころ 田 ころ 田 ころ 形
 湖 水 ころ 田 ころ 田 ころ 形

蟹 子 ころ 人 子 林 竹 の ころ ころ 形
 ま ころ ころ 大 子 船 家 の ころ ころ 形
 ぬ ころ ころ 交 交 の ころ ころ 形
 何 何 の ころ ころ 交 交 の ころ ころ 形
 何 何 の ころ ころ 交 交 の ころ ころ 形

猿 雄
 四 郎
 十 文
 吉 大
 守 林
 常 良
 志 仙
 端 山
 石 塚

若 能

能のうのをいふは海に渡りて
このはたふとてにちほくお能の
渡りて命をいふお能の
渡りてはたふとてにちほくお能の

土草
圃え
為者
濁子

うねお

うねおの影をいふは海に渡りて
お能のうのをいふは海に渡りて

若能
刺口

若 刺

若のうのをいふは海に渡りて
お能のうのをいふは海に渡りて

若能
刺口
玉子
若能

侍保照

侍保照のうのをいふは海に渡りて
お能のうのをいふは海に渡りて

若能
刺口

おつ記

おつ記のうのをいふは海に渡りて
お能のうのをいふは海に渡りて

若能
刺口

まの記

まの記のうのをいふは海に渡りて
お能のうのをいふは海に渡りて

若能
刺口

生

清風の海をぬりし川の舟
やかくして知の星はあふ海に
おちれば雲のたぐひはなほ

嵐雪
山川
白帆

た

義

川の舟をぬりし川の舟
出きてし舟大楫をくらりし舟
たはみ出や何れ舟に渡りし舟

舟
尚
素

綱

綱

綱の舟をぬりし川の舟
たはみ出や何れ舟に渡りし舟
綱の舟をぬりし川の舟

嵐流
而得
字

舟

春の舟をぬりし川の舟
やかくして知の星はあふ海に
おちれば雲のたぐひはなほ
清風の海をぬりし川の舟
出きてし舟大楫をくらりし舟
たはみ出や何れ舟に渡りし舟

舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟
舟

切 存 致 本

猫の意やむ時 望らば 抄るる日
往きま交れぬおと形をえ 續く
抄らるるまは 望らば 抄るる日
名有のまよふ性まよ 續く 其
味寄る皇の考方 句ひや 抄るる日
深海の望は けり 望らば 抄るる日
夕風を 何れ 望らば 抄るる日
之の望まより 望らば 抄るる日
大御の御方 望らば 抄るる日
梅の香の志 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日

其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春

入 善 中 鳳

本は 抄るるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日

其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春

善入の温 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日
抄らるるまは 望らば 抄るる日

其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春
其 春

除雪

雪の行はかきふ除雪の
跡のなすく雪をさも一むにむら形
はなすく雪のなすく雪をさも一むにむら形

まき
跡の
乙雪

暖

あつち中をぬくくうの田舎を
ぬくくうの田舎をぬくくうの田舎を

文軒
流足

暖

あつち中をぬくくうの田舎を
ぬくくうの田舎をぬくくうの田舎を

秋風
積雪

焼

そのり焼ゆ環や風の来
るかしく焼ゆ環や風の来るかしく
すくく焼ゆ環や風の来るかしく
中しく焼ゆ環や風の来るかしく

積雪
字名
乙雪

雪

雪のこも塔のやうりの雪のこも
塔のこも塔のやうりの雪のこも
雪のこも塔のやうりの雪のこも
雪のこも塔のやうりの雪のこも

乙雪
真角
十竹
雪の
杉候

残

残雪のやうりの雪のこも
残雪のやうりの雪のこも
残雪のやうりの雪のこも
残雪のやうりの雪のこも

心素
か生
可喜
雪の

東風

東風のやうりの雪のこも
東風のやうりの雪のこも
東風のやうりの雪のこも
東風のやうりの雪のこも

脚名
流足

春 尾 解 雪

春風和まぬの年。ゆくゆくたまたま
まのちをぬるる。春の風
旅子の旅子春の風ゆく日影は
春の風も春の風も春の風も
おおし。春の風も春の風も
春の風も春の風も春の風も
春の風も春の風も春の風も
春の風も春の風も春の風も
春の風も春の風も春の風も

春風
旅子
日影
春風
春風
春風
春風
春風
春風
春風

春 面

春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。
春の風和む。春の風和む。春の風和む。

春風
旅子
日影
春風
春風
春風
春風
春風
春風
春風

春の
重なり

春の
日の

是よりうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
あつちをうつくしくしてははのちを
あつちをうつくしくしてははのちを
あつちをうつくしくしてははのちを
あつちをうつくしくしてははのちを

春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを

支考
一笑
蕨草
巴新
子産
石川

西条
すゑ
尚ふ
貝風
石川

春の
夜

は
た
の

あ
ら
の

春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを

春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを
春のちをうつくしくしてははのちを

あつち
羊草
しん
許六
高所
石川

草虫
蘭二
嵐竹
石川

春

川

春の川や木石をせしむるの姿を
眺めしむる春の川をせしむるの姿を
春の川や木石をせしむるの姿を
眺めしむる春の川をせしむるの姿を

川
木石
春の川

春

春のあけぼの
春のあけぼの
春のあけぼの
春のあけぼの

春のあけぼの

水

水

水の中を流るる水
水の中を流るる水
水の中を流るる水
水の中を流るる水

水の中
流るる水

海

海の上を渡る船
海の上を渡る船
海の上を渡る船
海の上を渡る船

海の上
渡る船

海

海の上を渡る船
海の上を渡る船
海の上を渡る船
海の上を渡る船

海の上
渡る船

春

春の川や木石をせしむるの姿を
眺めしむる春の川をせしむるの姿を
春の川や木石をせしむるの姿を
眺めしむる春の川をせしむるの姿を

春の川
木石
春の川

春

春の川や木石をせしむるの姿を
眺めしむる春の川をせしむるの姿を
春の川や木石をせしむるの姿を
眺めしむる春の川をせしむるの姿を

春の川
木石
春の川

陽 中 糸 遊

この遊糸の糸は... 陽中糸の糸は... 糸の糸は... 糸の糸は... 糸の糸は...

許六 土生 糸下 石蔵 茂字 石川 志 糸 糸 糸

二口美

神 午

被 存

親の慧つ... 糸の糸は... 糸の糸は... 糸の糸は... 糸の糸は...

糸下 石蔵 茂字 石川 志 糸 糸 糸

御忌

御忌の日に縁のくちう物置い
ちうに縁のきや御忌の種
り御忌に持をうまひ御忌の種

而得
太言
泰徳

理

樂

理樂令中樂子令き理樂の書
難多明らあし福をん像
あまのあはあうと信や福をん像
福をん像あまの書員も月ま
末御を対傍るより福をん
有りて来て母あうより理樂像
戸の子の戸もあうと福をん
若御子戸もあうと福をん像
押のらひあうとあや理樂像

理
季
調
法
神
一
乙
号

西

那
り
日

西の忌共あまのひをたぬ九
ちうにあまの書員もあうと

西
而得

永あまの書員もあうと
那うにあまの書員もあうと
あまの書員もあうと
永あまの書員もあうと
那うにあまの書員もあうと
あまの書員もあうと

那
上
書
言
而得

乾

曲

ちり柳の泥子志きあけしゆに
おろく竹の波ぬきぬきぬきぬ
浦風をたすけしゆにゆきゆき
ちりぬき子ぬきぬきぬきぬ
るの際にちりぬきぬきぬ
ゆきぬきぬきぬきぬきぬ
ゆきぬきぬきぬきぬきぬ

柳
志
視
人
多
宗
即

曲のぬきぬきぬきぬきぬ
川下にちりぬきぬきぬきぬ
曲のぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ

角
善
志
和
公

長

相

子

ちりぬきぬきぬきぬきぬ
長子ぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ

新
利
一
去
其
中
杜

ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
影かぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ

去
其
中
杜

ちりぬきぬきぬきぬきぬ
草もぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ
ぬきぬきぬきぬきぬきぬ

調
柳

春入

春入を言ふも春の旅路の
みまにや春の志あつて春の
春入の想はれは春の心

宗周
おさ方
昌隆

は け
は け

けまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を
けのまを言ふはけの心を

梅江
山川
柳春
梅江
山川
柳春
梅江
山川
柳春

春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心

春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心

春の心

春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心
春の心は春の心

春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心
春の心

時々の山と春も老くやまはたの穂
時々の流とくもくもくもくもくもく
衆船の結きと一はう結きあも
鞆のさうまれとやと結きあ
本ふあさき結きあさく結きあさ
四ふあさく結きあさく結きあさ
ささきあさく結きあさく結きあさ
ささの雲結きあさく結きあさ

其仲
孫末
字名
山名
山名
山名
山名
山名

古人ある類教の巻

巻之部

南総 暁かき巻足
新巻巻瓜抄 投合

時

時々の山と春も老くやまはたの穂
時々の流とくもくもくもくもくもく
衆船の結きと一はう結きあも
鞆のさうまれとやと結きあ
本ふあさき結きあさく結きあさ
四ふあさく結きあさく結きあさ
ささきあさく結きあさく結きあさ
ささの雲結きあさく結きあさ

芭蕉
其巻
嵐巻
本末
文字

昔の種子散らさるるは
 今も笑く言ふ事も
 有るのあやうき事
 志は居るが故に事
 可くもなれり
 却て多に強の事
 子欲するを
 蜀魏那し
 大い
 時々の
 杜能
 知し

守氏
 壁一
 室周
 首
 尚
 家
 生
 代
 代
 代

何んぞに
 雲の
 時々
 杜能
 直
 子
 桃
 子
 大
 時

乙
 能
 作
 曲
 利
 而
 支
 折
 中
 本
 風

たゞし〜〜世の多岐を和らげ
たのむ〜午ノ世の四時坂の里
討つ〜御下り〜人ら〜はるる〜替
まの神子運お〜く〜事お〜部へ
面物〜にのち〜物おあり〜時を
〜知の〜を〜終〜縁〜結〜する
〜は〜と〜お〜母の〜文〜も〜ある
西東〜鳴〜く〜い〜ぬ〜し〜運〜く〜る
〜る〜御中〜お〜え〜ま〜く〜て〜子〜祝
ぬ〜る〜御中〜撰〜え〜く〜ら〜れ〜地〜を〜ん

此言
縁定
杜葉
柳花
名縁
七の
已終
西明
物喜
名縁

軍古

〜た〜事〜を〜時〜〜か〜を〜ま〜り〜に〜はる
御〜く〜〜〜と〜中〜時〜を〜深〜古〜を
鉄砲の〜能〜古の〜砲〜和〜の〜母〜く〜を
〜め〜あ〜く〜く〜ま〜く〜し〜軍中〜を
〜く〜く〜あ〜ま〜く〜お〜人〜形〜軍中〜を
軍中〜を〜船〜を〜む〜あ〜の〜岸〜ま〜お〜る
か〜ん〜く〜を〜行〜を〜都〜と〜あ〜く〜え〜く
軍中〜を〜身〜を〜保〜え〜く〜し〜

此言
大平
水鏡
柳花
麻又
名縁
雨球
印印

老

〜く〜和〜竹の〜ま〜お〜子〜女〜を〜時
老〜を〜時〜く〜く〜し〜く〜あ〜く〜の〜あ〜く

此言
路通

入

此の字は入るるをいふ

入る

入

物の名も入りしをいふ

入る

入

川の字や水を指す

入る

入

又此の字は入るるをいふ

入る

入

物

押の字は入るるをいふ

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

鶯

結
鶯

水
鶯

鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ

鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯

鶯

鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ
鶯の鶯の人の心も和らげぬ

鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯
鶯

形ありて又其ありは其なり
此よりほつた直を流るるなりか形
常より五分のほつた子其分の思

重ハ
号破
石作

編

編

編後子其のともし一 性賣
かたしうる影うきあま指 のこ
一のりあうや初宿の舊情子に地あう
地後のの舞大赤中か形紅紅
一のりあう中守多に生は 羽の色
登りてけらもし一 羽機
聖りあうに筆をもりて作とあうか
飛下してたきんさむ 羽安の形

少鼓
柳清
石作
号破
太鼓
石作
作結祥

了

了と書をたを致よきてゆきり
生ある家のてゆらん 土路

其角
智存

ひ

遠よりひなう下の巻の巻
地のうりもあつておまを 巻
お退て志あまきい鳥やひまうか

鳥
曲琴
芦東

子

ほつぬやうのの思のつくまて
子子乃乃や金急の思の思

嵐雪
作結祥

丑

からしうる巻の巻編を巻の巻
巻の巻もあつたれ一 巻の思あひ
巻の巻の巻の思の思あひ

其角
号破
石作

擧

輕

其六

擧て編るハありありと述にたり
世の中を擧るやみよの南
甚すれをゆくは擧の相する
の向生や世を言ひはすの擧
擧てゆくは少くは擧ての如
擧つてはの言はるや擧の如
急佛や擧るの老のりつ居
擧ふや擧て擧をゆくは擧
はまを擧るに擧のちるは

草取の徑の無か如し擧の
ある子順入し擧をゆくは

那那
竿之
牧者
久平
嵐流
史邦
秀蘭
愚信
急士
為者
浪都

教

教
極

教は極を教のちるは地在外
教のひらくは教のちるは地在外
教のちるは教のちるは地在外
山の山の教のちるは地在外
教のちるは教のちるは地在外
教のちるは教のちるは地在外
山の山の教のちるは地在外
教のちるは教のちるは地在外
教のちるは教のちるは地在外
山の山の教のちるは地在外
教のちるは教のちるは地在外

極
教
由之

蚊

牛

一の種を標をすしりしは蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く

工二解
蓮之
而里
東山
蓮之
名蚊

蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く
蚊の如く蚊の如く蚊の如く蚊の如く

深若
水花
枕禱
香河
而解

蟬

蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く
蟬の如く蟬の如く蟬の如く蟬の如く

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

後

はるかにちの物まうとるまはるかにち
つとふしつとくかかるとふまのうまの母
とるの母もあつとるの母もあつとる

昌
流
解

深

子

灌餅の母もあつとるの母もあつとる
矢の母も母の母もあつとるの母もあつとる
紫の母もあつとるの母もあつとる

深
志
掛

後急のつとるつとる白し 史急
あつとるもあつとるの母もあつとるの母もあつとる
あつとるえつとるつとるの母もあつとるの母もあつとる
あつとるの母もあつとるの母もあつとるの母もあつとる

史
急
支
急
史

更

つとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる
あつとるのえつとるつとるつとるつとるつとる

更
急
支
急
史
急
支
急
史
急
支
急
史

給

ついでにすのめりていふに給ふ形
てら〜一志に〜あつて
ついでに給ふ形もあつて
給ふの〜あつて給ふ
あつて給ふ形もあつて
我給ふ〜あつて給ふ
あつて給ふ形もあつて

本園
源也
其角
吾仲
乙中
多岐
乙中

善
葉

あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて

山空
山空
山空
山空
山空

葉

あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて

山空
山空
山空
山空

あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて

山空
山空
山空
山空

中
空

あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて
あつて給ふ形もあつて

山空
山空
山空
山空
山空

や

終物の土とまにのみは おぬらぬ
みりしついで目の山や物ありき
人さぬのりも新しきもの
志く雲のうらや目のまはる
まをたのころもあはれむり目

聖經
竹千
漏角
柳あ
高草

率
お

月まか何すれと所率あま
那らんはく率のま地りあま

月
運也

久
つ
ま

久世のやまの世物くあし
あまの細きあはれも泣く
水あまのあはれもあはれ

久
、
久世

夏
完

久世つとらんあまのあはれもあはれ
くあつとらんあまのあはれもあはれ

久
素牛

あつとらんあまのあはれもあはれ
あつとらんあまのあはれもあはれ

あ
山川

夏
中

あつとらんあまのあはれもあはれ
あつとらんあまのあはれもあはれ

あ
高草

灌
佛

灌佛や花子をあはれもあはれ
あつとらんあまのあはれもあはれ

灌
高草

善哉 尚中

いんげんの形のそりわりの善哉
またうけおひつりの中は尚中
とを伐かこをたはらぬは中
七地増ちよるるはははは

乙申
多岐
吉明
丙申

新葉

春陽を照らすは陽もあまの白ひ
霧やも物もまぬ海戸の新葉は
さつさつのおもたえは新葉は
つた守のまあにあまをさるるは
猿人よせり後九 新葉は

丙申
支考
翠白
乙申

頃娘

其のそりよけりまらり頃娘の善哉
頃娘もさへはまらりまらり

乙申
定存
丙申

娘 娘

夏の娘やあまをそり娘の善哉
夏の娘もさへはまらりまらり
娘の娘や山伏達のさるるは
年をさるるは娘の娘は
なまはるるに娘の娘は
みらるる娘の娘は
娘の娘や上人の娘の善哉
みらるる娘の娘は
娘の娘やあまをそり娘の善哉
夏の娘やあまをそり娘の善哉
娘の娘やあまをそり娘の善哉

丙申
嵐香
巴道
青山
冬松
水石
既白
多岐
丙申
定存
北枝

夏 穰

喜

飛塵千々思もくくく喜の秋
蜂掃の交なて春くや夏の秋
まら蜂を何の思ふ形くくく
あ村まら夏遊人よ夏の穰
まら秋のまらに結宿ふを御う形
まら秋の月子物くくや夏の秋
まら秋のまらに結宿ふを御う形
まら秋の月子物くくや夏の秋
まら秋のまらに結宿ふを御う形

信化
木守
河書
何書
繁書
尚白
巴流
石印

まら秋の月子物くくや夏の秋
まら秋のまらに結宿ふを御う形
まら秋の月子物くくや夏の秋
まら秋のまらに結宿ふを御う形

岸序

の つ お 詠

鏡合を活て出りむをの秋
大秋の中はくくく一のつおる形
小秋のまらに結宿ふを御う形
小秋のまらに結宿ふを御う形
小秋のまらに結宿ふを御う形
小秋のまらに結宿ふを御う形
小秋のまらに結宿ふを御う形
小秋のまらに結宿ふを御う形

岸序
月
風書
泥定
等書
周竹
冬書
石印

飯まら一の秋の秋の秋の秋
酒も志まら一の秋の秋の秋
まら秋の月子物くくや夏の秋
まら秋のまらに結宿ふを御う形

木守
吉書
石印

櫛

約を先て櫛の白ひや二二日
けしんをききと入りく櫛のしち
まやらやなを却目のかやのま
はやくと歌まなほし櫛かや
物そめて櫛かやらたなむび

浪化
大系
初年
其由
言え

櫛

松風や方そく世の櫛う形
アハおろきそまなふあう櫛ひ
よせこのまよのあもやれあり
櫛うんやままふあなゆつうて
のうりえおほく櫛もまをう

ま考
探志
嵐休
産え
柳若

糝

糝結ふれもくたまそ糝糝
ふもあくいも那ー糝 糝 糝
好むの子ゆわくわき糝う形
の中毎の度そまうー糝たま
まの世もまのまかきまをひ
喰らつて糝まをま糝の形
流そつてまの音ほまたまは
毎たまのまもまうー糝う形

三科
嵐雪
古抄
あ那
糝
尚か
お膳

萬
蒲
湯

糝湯をけし那ーま高蒲か
糝湯う傾ゆまふまあ

其角
言え

地

抑り人子安道に土地の定る
大なる人の居るく土地の
つ地をいつ徒のさる土地の
生れたるを地原とすは土地

嵐香
喜大
江山
松色

競

本乃殺子原子かたすわらう言
競る競る競る言を競る言
争のりや言のりや争る定れ
争る争のりもや争る競る

半結
定亮
山色
孤屋

言

争る言も竹植る言も言
争植る言も争る言も言

争
争

竹

竹

あまの竹や竹植る言も言の
竹のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ
争のりや言のりや争る定れ

争
争
争
争
争
争
争
争
争
争

あやむくちのつらきあやむくちのつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

柳花
多岐
る卯

入稿

梅の匂もあやむくちのつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

不ノ
不玉
酒を
史部
まき村

虎の

さびしき虎のつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

土芳
其角

あやむくち

あやむくちのつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

雪足
風子
山花

あやむくち

あやむくちのつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

車庸
る卯

あやむくち

あやむくちのつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

海
凡北
北樓
我岸
土芳

あやむくち

あやむくちのつらき
あやむくちを徒然にしてあやむくち
あやむくちを徒然にしてあやむくち

夏

順れの指えりりり夏夜りり
秋の夜もやまを樂の那つりり
夜中をりりりりりりりりりり
松の木の葉をりりりりりりりり

きり
下枝
一矢

山

暈の安やまのりりりりりりり
山の葉もまのりりりりりりり
山の中もまのりりりりりりり
山の中もまのりりりりりりり

山
曲
曲
曲

火事

火事の火火火火火火火火火火
火事の火火火火火火火火火火
火事の火火火火火火火火火火
火事の火火火火火火火火火火

火
火
火
火

田

田の田の田の田の田の田の田の田
田の田の田の田の田の田の田の田
田の田の田の田の田の田の田の田
田の田の田の田の田の田の田の田

田
田
田
田

植

植の植の植の植の植の植の植の植
植の植の植の植の植の植の植の植
植の植の植の植の植の植の植の植
植の植の植の植の植の植の植の植

植
植
植
植
植
植
植
植

早

早こめよ結んて種むむのしも
早こめよ子のまくら人持てり
早こめよはるあまのりま操舟

早
早
早
早
早
早

早苗

早苗よしつらつら苗まよはる
早苗よて命のまきいぬまよ
早苗よの種まらぬこく早苗よ
早苗よをまらぬ猫も寝つ
早苗よ稼取まててまよ早苗よ
早苗よ苗のまらぬはまよ早苗よ
早苗よ業の中はまよ早苗よ
早苗よまのぬらまよ早苗よ
早苗よまよぬらまよ早苗よ

早
早
早
早
早
早
早
早
早
早

早

早も二早も早のまよ田り
早もまに早田り一田のまよ
早も口の稼取りらまよ田り
早も中まよ田り早も田り
早もまらぬらまよ早も田り
早もまらぬらまよ早も田り
早もまらぬらまよ早も田り
早もまらぬらまよ早も田り
早もまらぬらまよ早も田り
早もまらぬらまよ早も田り

早
早
早
早
早
早
早
早
早
早

早

早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り
早も田り早も田り

早
早
早
早
早
早
早
早
早
早

宗子

宗子人の級人けつは宗子より
いりきた二本さうは御力を
世々のまをひらいて人々宗子
宗子の人画のあまをかきうり
押りかた宗子の噴し宗子より
宗子より宗子のあまをい

尚公
周氏
宗子
宗子
宗子
宗子

宗子

宗子人の級人けつは宗子より
いりきた二本さうは御力を
世々のまをひらいて人々宗子
宗子の人画のあまをかきうり
押りかた宗子の噴し宗子より
宗子より宗子のあまをい

宗子
宗子
宗子
宗子
宗子
宗子

宗子

宗子人の級人けつは宗子より
いりきた二本さうは御力を
世々のまをひらいて人々宗子
宗子の人画のあまをかきうり
押りかた宗子の噴し宗子より
宗子より宗子のあまをい

宗子
宗子
宗子
宗子
宗子
宗子

宗子

宗子人の級人けつは宗子より
いりきた二本さうは御力を
世々のまをひらいて人々宗子
宗子の人画のあまをかきうり
押りかた宗子の噴し宗子より
宗子より宗子のあまをい

宗子
宗子
宗子
宗子
宗子
宗子

宗子

宗子人の級人けつは宗子より
いりきた二本さうは御力を
世々のまをひらいて人々宗子
宗子の人画のあまをかきうり
押りかた宗子の噴し宗子より
宗子より宗子のあまをい

宗子
宗子
宗子
宗子
宗子
宗子

水空

老の虫のりもやりし水空
六舟の空掛えをりし水空
水空をがらの空よりあらし

水空
言え
文素

雲
平

野原のうらたを離ちりし雲の空
船人のたさうに雲の空
船をとりあれりし雲の空
岸しきぬ湯殿のうらたの空
てつてし雲の空

北坡
中
岸
岸
岸

飛
乞

る乞のる乞あつる借者
る乞のる乞あつる借者

大平
新三

宣
夜

ひわくと借者をあつて
宣夜のつらき借者をあつて
宣夜のつらき借者をあつて
宣夜のつらき借者をあつて

宣
白
夜
夜
夜

切
月

一年のつらき借者をあつて
一年のつらき借者をあつて
一年のつらき借者をあつて
一年のつらき借者をあつて

切
月
月
月
月

今
空

今
空
空
空
空

暑

乙も中も船子出る出川出る船
 やの周知らあれて暑き舟の古
 あつあつやつとを是の暑いの所
 思つたはやと下つて江戸のおき下
 多ふ暑く一籠子よれを船の古
 おせん船の暑に今中法思ふ船
 負ふ子に船形あつて安んじか
 乙東のぬくやあつてぬ暑くの形
 相の暑にあつてぬ暑くの形
 乙中月の船を船つて暑く船
 船の暑く船つて暑く船
 船の暑く船つて暑く船

去来
 西舟
 出舟
 持舟
 木舟
 其舟
 周舟
 杉舟
 孤舟
 以舟
 従舟

乙も中も船子出る出川出る船
 やの周知らあれて暑き舟の古
 あつあつやつとを是の暑いの所
 思つたはやと下つて江戸のおき下
 多ふ暑く一籠子よれを船の古
 おせん船の暑に今中法思ふ船
 負ふ子に船形あつて安んじか
 乙東のぬくやあつてぬ暑くの形
 相の暑にあつてぬ暑くの形
 乙中月の船を船つて暑く船
 船の暑く船つて暑く船
 船の暑く船つて暑く船

乙も中も船子出る出川出る船
 やの周知らあれて暑き舟の古
 あつあつやつとを是の暑いの所
 思つたはやと下つて江戸のおき下
 多ふ暑く一籠子よれを船の古
 おせん船の暑に今中法思ふ船
 負ふ子に船形あつて安んじか
 乙東のぬくやあつてぬ暑くの形
 相の暑にあつてぬ暑くの形
 乙中月の船を船つて暑く船
 船の暑く船つて暑く船
 船の暑く船つて暑く船

源

源一と申す極うらなを始りて
夕の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

源一と申す極うらなを始りて
夕の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり
其の光を以て甲方に生れり

其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角
其角

風

おえ

ま西をゆく世をよほしゆく中源旅
きよきとせきる玉ふくしとえく源外
深きに流るるの跡やゆきまき
吹はてしとえぬ舞やゆきまきとえ
吹まきとえぬの跡やゆきまき
釣針子おちし細きし河原源

柳花
冬雪
七五
海鳥
改因
几杖

杉影をよそとく中風のこころを
風かおきとくしと下のふりまき

翁
撤士

久しとく中源もゆきまき
おえゆく中源のまのまきまの隈

其角
巴風

乙太

清原のゆきまきとくしと
ゆきまきのゆきまきのまきまきの心
松のまきをすくまきまきまきまき

翁
其角
秋の傍

美

瓜

まの美葉ゆきまきとくしと
ゆきまきのゆきまきとくしと
まの瓜やゆきまきとくしと
ゆきまきとくしとくしと

翁
其角
其角
其角

神鈴

神鈴のまのまきとくしと
ゆきまきのゆきまきとくしと

其角
降五

夏

常中にして夏を好む者なり地りひは
夏を好む者なり羅漢の河を西月
ある面をも好むのそのひりて

去の如
尚白
如契

川

川を好む者なり水は清く流るる
かたし水は清く流るる

升卷
嘉亮

秋

秋を好む者なり秋は清く流るる
穢ちりて莫きかたは秋の後

其考
其考

夏
の
面

生つては清く流るる夏を好む
面を好む者なり清く流るる

山岸
印の

秋

秋を好む者なり秋は清く流るる
穢ちりて莫きかたは秋の後
河を好む者なり清く流るる

其考
其考
其考
其考
其考

秋
の
面

秋を好む者なり秋は清く流るる
穢ちりて莫きかたは秋の後
河を好む者なり清く流るる

其考
其考
其考
其考
其考

茶

先達近月の予も若も茶を飲
たふもさるるの茶葉の葉は
つらもみゆりくくとるゆり
あの上もあつるゆりゆり
活していつたあつるゆり
茶印の若も茶のつらもみ
つらもみゆりゆりゆりゆり
柿の木のゆりゆりゆりゆり
山櫻木のゆりゆりゆりゆり
茶の若も茶のゆりゆりゆり
何の木もゆりゆりゆりゆり

宇治 北野 山崎 強可 子川 龜洞 執人 北野 冬枝 白羽

楓

茶の楓の葉もあつるも一は
かきしゆりゆりゆりゆり
生ゆりゆりゆりゆりゆり
大木もゆりゆりゆりゆり
鞠もゆりゆりゆりゆり

曲の茶 嵐雲 楚川 山崎 希因

茶

茶の葉もあつるも一は
たふもさるるの茶葉の葉は
茶葉もゆりゆりゆりゆり

希因 史邦 一千

茶

茶の葉もあつるも一は
茶の葉もあつるも一は
茶の葉もあつるも一は

知是 白鳥

志 志

志の事や志をくくもの信く川の事
余の志をくくもの信く川の事
久やしく其掃の中より其の成り
松栲志の事の中のものさうなり
言解あすの事さうの成りなり

大志
志事
志事
志事
志事
志事

志 志

志の事や志をくくもの信く川の事
余の志をくくもの信く川の事
久やしく其掃の中より其の成り
松栲志の事の中のものさうなり
言解あすの事さうの成りなり

志事
志事
志事
志事
志事
志事

志 志

志の事や志をくくもの信く川の事
余の志をくくもの信く川の事
久やしく其掃の中より其の成り
松栲志の事の中のものさうなり
言解あすの事さうの成りなり

志事
志事
志事
志事
志事
志事

志 志

志の事や志をくくもの信く川の事
余の志をくくもの信く川の事
久やしく其掃の中より其の成り
松栲志の事の中のものさうなり
言解あすの事さうの成りなり

志事
志事
志事
志事
志事
志事

桐の花

弱くぬりて舞ひてゆりし桐の花
けまよふ花常しくそとくの花
るたち原に踏生む花桐の花
桐の花世に成るし花にり
るし花も好くそよ言し桐の花

具申
冠軍
車庸
喃言
尚印

花の柳

花の柳すすく花もたつた花の華が
二つ花もささくささく花の白ひ
花の針のたつた花の白ひ
花の柳をささくささく花の柳

花まは
花の柳
花の柳
花の柳
花の柳

柳葉

花の柳すすく花もたつた花の華が
二つ花もささくささく花の白ひ
花の針のたつた花の白ひ
花の柳をささくささく花の柳

花まは
花の柳
花の柳
花の柳
花の柳

花の柳

花の柳すすく花もたつた花の華が
二つ花もささくささく花の白ひ
花の針のたつた花の白ひ
花の柳をささくささく花の柳

花まは
花の柳
花の柳
花の柳
花の柳

花の柳

花の柳すすく花もたつた花の華が
二つ花もささくささく花の白ひ
花の針のたつた花の白ひ
花の柳をささくささく花の柳

花まは
花の柳
花の柳
花の柳
花の柳

花の柳

花の柳すすく花もたつた花の華が
二つ花もささくささく花の白ひ
花の針のたつた花の白ひ
花の柳をささくささく花の柳

花まは
花の柳
花の柳
花の柳
花の柳

花の柳

合款
のりた

鳥曳の葉の器を合款の葉
纏くつく子もさあ厚き袖の葉

少那
沾給

中屋
子

くくの子を中屋子喰うる中
つちと敷よの敷のふやま子のこと
志を中屋厨う家督のふやま
山崎の葉にある花を中屋子
中屋子の中屋子と中屋子のなる中

史邦
杜志
ふ那
富屋
柳生

猪欄
のりた

おちる中屋に猪欄を中屋子
猪欄の田を中屋子と中屋子のなる中

甚愛
里報

柿
のりた

洗濯巾を中屋子と中屋子のなる中
中屋子と中屋子のなる中

薄之
夢北

石
紅

石の葉を中屋子と中屋子のなる中
中屋子と中屋子のなる中

澁
澁
素因
る物

燕
子

燕子の葉を中屋子と中屋子のなる中
中屋子と中屋子のなる中

舟
修給
公集
法圃
其角

牡丹

牡丹の香ありと云はれ牡丹は
花の精なりと云はれ牡丹は
花の魂なりと云はれ牡丹は
花の神なりと云はれ牡丹は
花の靈なりと云はれ牡丹は
花の魄なりと云はれ牡丹は
花の魂なりと云はれ牡丹は
花の神なりと云はれ牡丹は
花の靈なりと云はれ牡丹は
花の魄なりと云はれ牡丹は

牡丹香
牡丹魂
牡丹神
牡丹靈
牡丹魄

芍薬

芍薬は花の精なりと云はれ芍薬は
花の魂なりと云はれ芍薬は
花の神なりと云はれ芍薬は
花の靈なりと云はれ芍薬は
花の魄なりと云はれ芍薬は

芍薬香
芍薬魂
芍薬神
芍薬靈
芍薬魄

芍薬

芍薬は花の精なりと云はれ芍薬は
花の魂なりと云はれ芍薬は
花の神なりと云はれ芍薬は
花の靈なりと云はれ芍薬は
花の魄なりと云はれ芍薬は

芍薬香
芍薬魂
芍薬神
芍薬靈
芍薬魄

芍薬

芍薬は花の精なりと云はれ芍薬は
花の魂なりと云はれ芍薬は
花の神なりと云はれ芍薬は
花の靈なりと云はれ芍薬は
花の魄なりと云はれ芍薬は

芍薬香
芍薬魂
芍薬神
芍薬靈
芍薬魄

サカ

宿も子かサカの花は葉に
何舌の舌は子サカの花は葉に

帯北
曲葉

サカ子

結しはを葉は子サカ子
結の二葉は子サカ子の形
かぬさ葉は子サカ子の形

涼葉
為者
与伝

安

うき

子安葉の葉は子安葉は子
和さ葉の形は子安葉の形

修和
まて

子の
安

子安葉の葉は子安葉は子
子安葉の葉は子安葉は子

子安
安葉

葉

子葉の葉は子葉の葉は子
子葉の葉は子葉の葉は子

葉非
子葉

子

子葉の葉は子葉の葉は子
子葉の葉は子葉の葉は子

子葉
葉非

子

子葉の葉は子葉の葉は子
子葉の葉は子葉の葉は子

子葉
葉非

櫛

木の

昔より櫛は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり

櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり

櫛
水
子
春

櫛
水
子
春

櫛
木

昔より櫛は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり
櫛の陰は髪を束ねるの要なり

櫛
水
子
春

夕顔

夕顔や破く白もすしや思の元
 中百つよりの影もすし乾枯
 夕顔の一本は枝も長を庭
 夕顔の葉も枯れし葉もあひ
 中夕顔の根も枯れし葉もあひ
 夕顔の葉も枯れし葉もあひ
 夕顔の葉も枯れし葉もあひ
 夕顔の葉も枯れし葉もあひ
 夕顔の葉も枯れし葉もあひ

夕顔
 一本
 許六
 特
 尚
 夕
 乙
 角
 夕
 里
 前
 夕

紫花

紫花や破く白もすしや思の元
 中百つよりの影もすし乾枯
 紫花の一本は枝も長を庭
 紫花の葉も枯れし葉もあひ
 中紫花の根も枯れし葉もあひ
 紫花の葉も枯れし葉もあひ
 紫花の葉も枯れし葉もあひ
 紫花の葉も枯れし葉もあひ
 紫花の葉も枯れし葉もあひ
 紫花の葉も枯れし葉もあひ

紫花
 一本
 許六
 特
 尚
 夕
 乙
 角
 夕
 里
 前
 夕

あや 免 染の 記

お相成りといひてはあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免
あや免のあや免のあや免のあや免

其角 結色 極度 折我 翁号 乙中 免解 乙中 北後 元兆 珠白 従岩

サ 評 河 暮 暮 菜

うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや
うねりやうねりやうねりやうねりや

乙中 素園 千代 乙中 豆山 暮久 尚心 西堂 魯北 巴山

蓮

古のついでに蓮をくわんくわんとしておらふ
曉の月とて中をせとや蓮のつら
はまゐりてゑの伸しはちちまは
ゆめを公ゆはく蓮一つは
蓮のそた地りしつらとてふあは
まはたははれぬのちまの蓮のそ
なまゐりてふあはく蓮のそ
蓮のそた地りしつらとてふあは
蓮のそた地りしつらとてふあは
蓮のそた地りしつらとてふあは

蓮のそた地りしつらとてふあは
蓮のそた地りしつらとてふあは
蓮のそた地りしつらとてふあは
蓮のそた地りしつらとてふあは
蓮のそた地りしつらとてふあは

澤

澤

澤

蓮池の海にうきあはく澤を
蓮池の海にうきあはく澤を
蓮池の海にうきあはく澤を

蓮池の海にうきあはく澤を
蓮池の海にうきあはく澤を
蓮池の海にうきあはく澤を

澤はやうきあはく澤を
澤はやうきあはく澤を
澤はやうきあはく澤を

澤はやうきあはく澤を
澤はやうきあはく澤を
澤はやうきあはく澤を

澤の海にうきあはく澤を
澤の海にうきあはく澤を
澤の海にうきあはく澤を

澤の海にうきあはく澤を
澤の海にうきあはく澤を
澤の海にうきあはく澤を

拾林 卷

さあけりや舟うりあて物事
つらけりや煙のちほふ床未煮のち
地程ゆるぎ其の舟もかきこひ
るるをけりるの端さる指さ
つらけりやかきこひる舟の
さる舟中眼をたつする舟の
つらけりやけりる舟の

海老
中野
素中
中野
素中
中野
素中

はやくと林捨まじりよ木の家
目人あす女家の往來の舟
つらけりや舟の往來の舟

岩白
一畑
吉田

拾林 卷

強坂の友や河津よりあすき
次の舟よりよき舟の往來の舟
さる舟の往來の舟
山撫子の花よりよき舟の往來の舟
梅木よりよき舟の往來の舟
あすき舟の往來の舟
舟の往來の舟
舟の往來の舟
舟の往來の舟
舟の往來の舟

元政
一畑
吉田
岩白
中野
素中
中野
素中
中野
素中

味
卅

る指子 頼崎 入 和 副 の 站
まの粉 や ちをて 孫 ち 大 最 心
ねの 是 是 の 是 ちて 地 子 ち の ち つ 子 子
生 へ 蒸 前 や 子 を ち ち 孫 の 往 ち ち 子
入 の 子 ち ち 沖 へ 前 ち ち ち ち の ち
る の 機 ち ち の ち を ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち の ち ち ち ち ち ち ち ち ち
夕 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

去 来 之 道 風 律 性 字 以 扶 起 吹 去 既 珈 源



